「んっ…あはぁ！うっ、うぅ……///」
「女の体で角オナニーするのもあっ、んっ悪くないな…///」
「オレ様のかわいいクリトリスが机の角に擦れて、すごく気持ちいい…はぁはぁ」
「はぁ、はぁ、かわいい角におまんこ擦るたびにびくびくしててオレ様、かわいすぎる///この体見てるだけで興奮が高まってきちまうぜ…///」
「でも、もうこんな机なんかじゃなくて本物…本物のチンポほしい///」
「そうだ団長のチンポで試してみるか…」

「あっあああ！そんな、こと……チンポのこと考えながらおまんこ擦ってたらい、イキそうになってきた///」
「イっちゃう…オレ様のかわいいおまんこからえっちなお汁溢れてくるっ！」
「あっ、ああっ！んっ！んくぁぁ！イグっ！おまんこ机にヌルヌル擦れてイクっ、イクイクぅ！」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「あああっ！出ちゃうぅ！おまんこ汁、オレ様のおまんこからぴゅるぴゅるってえぇ！　あっああ！」
「きもちいきもちいよぉ！女の体で、イクの気持ちよすぎるよぉ！」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はぁはぁ…
おまんこ…
とろとろになっちまった
こんなに出しちゃうなんて
流石オレ様の作った
敏感ボディだぜ」
「感度良好で
かわいく作れてる
こんな可愛いオレ様が
イクところを
男が見たらたまらないだろうな」
「はぁ…はぁ…
でも、男と違って
イった後も
まだなんか膣の奥が
むずむずするな…」
「…。
もう一回…もう一回
やってみよう」
ビクン
ビク
ビク
ドキ
ドキ
ドキ

「んっ、あんっ！あぁっ！うっっ！クリトリスにおまんこ粘液からみついて擦るたびにぐちゅぐちゅってエッチな音がしてる」
「はぁはぁ、つるつるのおまんこに角がくりゅくりゅ当たって、これまたすぐイっちゃいそう」
「奥、どんどん切なくなってどんどんチンポがほしく…///」
あんっ、おまんこ、とぎれてくるっ
あっ
あっ
あ

「はっ！ はっ！
あん！ ああっ！
気持ちいい！
いっぱい擦ると、ああっ
おまんこ汁、止まんない！
エッチなお汁またぁ！
出ちまうよぉ！」
「あっ！ ああっ！
イクっ！ イクっうう！
女の体でまたイッちゃう！！
あ、あ、あ、あああっ！！」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
はっ
あはっ
あっあっあっ
あっ
あっあっ
あっあっ
あっあっ
イグ
おまんこ
またイグ
キュン
キュン
キュン
キュン

「あうぅぅぅ！
んっ！　あん！
ああぁっ！　出てるぅ！
またえっちなおまんこ汁
いっぱいお漏らししちゃってるぅ！」
「あはっ！　すごい
オレ様の体♡♡
すごくえっちになっちまってるぜ
こんなの♡♡
何回オナニーしても収まらないよぉ」
ビクン
ビクッ
キュン
ドキ
でるっ
あぁぁっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はぁ…はぁ…
これが女の体でオナニーか…
これはやめられないぜ」
「だけど、はぁはぁ
もう我慢できない
机の角でこんなに気持ちいいんだ
チンポで、このとろとろおまんこの内側をじゅぷじゅぷえぐられたらどれだけ気持ちいいのか試してみたくなってきた」
「ヒヒヒ、こりゃあ
団長の童貞でも奪って
実験してみるしかないな」
「いい方法も思いついているしな…
フフフ楽しみだぜ」
ビクン
ビクン
ビクン

「さぁ団長
今日はチンポ壊れるまで
ザーメン膣出ししてもらうからな
ヒヒヒヒヒ！」
「ククク、おいおい団長…
おまんこチンポ
擦りつけてるだけで
もうギンギンに
なっちまってるじゃねーか」
「なら…期待通り
膣内でチンポ
きもちよーくしてやるから
まってろなぁ///」
ドキ
ハァハァ
ニヤ
ドキ
ニヤ
ハァハァ
ぷりぷり
ぷりぷり

「んっ！　あはぁ！
きたきた…団長のチンポ…
じゅっぷり挿入ってきたぁ…」
「ひひっ！　膣内でビクビクしてるぞ？
ん？　なんかいつもより
大きくなってないか？」
「ええ？　あれ
おいちょっと団長、もしかして
もう射精しちゃいそうなのか？」
はぁはぁ
あぁ
あぁ
あぁ
はぁはぁ
あっ
はぁはぁ
あっ
あっ
ん～
あっ
ビクビクしてる
ビク
ビク
ビク
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐっぐっ
ぐっ

「んぁ！　ちょっ！　団長！　なに射精して！　ああっ！　あっ！」
「オイコラ！　勝手に射精するな馬鹿！　んっ！　ああっ！」
「あっ！　ああっ！　だめ！　ダメだって！　んっ！　あんっ！」
ビュッ
ビュるるる
ビュる
ビュる
ビュ
ビュ
ビュ

「っだぁ！　この早漏！
挿入れただけで
勝手に射精しやがって…」
「こんなんじゃ先が
思いやられるぞ？」
「団長はこれから
オレ様が満足するまで
永遠に射精させられるんだからな」

「まぁいい…まずは一回目だな…」
「ほら、こうやってちゃーんとオレ様のおまんこに何回、犯されたかお腹に書いといてやるからなヒヒヒ！」
「何回イけるか楽しみだなぁ？」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「ほら、抜かずに次行くぞ？
ちゃんといっぱい射精しろよな」
「んっ！　ふふ、イったばかりで
敏感になってるのかな？」
「ちょっと動いただけなのに
気持ちよさそうに
チンポをびくんびくんさせてるぞ？」
ハァハァ
ハァハァ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビちゃ
ビちゃ
ビクッ
ビクッ

「あんっ！　早漏ザーメンが膣内でぐちゅぐちゅ描き混ざってる！」
「団長！　団長とセックスの音ぉ！あんっ！　ああっ」！！　うあぁ！！すごく！　ああっ！えっちな音出ちゃってるぞ！」
「あ！　ああああっ！団長のザーメンまみれのチンポきもちいい！　ああぁ！　あん！」
あっ　あっ　あっ
あっ　あっ　あっ
ビュ
ビュ
ビュ
パン
パチュ
ズズズ
パン
ぐちゅ

「ああっ！　団長！
ザーメン！
また子宮にザーメン流し込め！
ほら！　ほらぁ！」
「激しくオレ様の膣内で
気持ちよくさせてやるから
いっぱいザーメン飲ませるんだ！」
「あっ！　大きくなってる！
団長のザーメンチンポ！　くる！
きちゃう！！　あっ！　あっ！
ああああ！！」
ああああ
ビク
ビク
ビク

「あっ！　ああぁ！　んぁ！！
ああぁっ！
射精てるっ！
団長のザーメン
びゅーびゅーいってるよぉ！」
「子宮の中で収まりきらないくらい
いっぱいザーメン
流し込まれてるっ！」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はぁ…はぁ…
団長、団長！
せーしもっとぉ//
もっと頂戴//」
「まだ、おまんこ
壊れてないからぁ
このままずっと
いっぱい熱い精液流し込んでぇ//」

あっ あぁ あぁっ
あぁっ あぁっ
イっ あぁっ あぁっ
数時間後…
「あっ！ ああ！ あふ！ 団長ぅぅ！ またぁ！ またイっちゃう！」
「団長のイキまくりのザーメンチンポでまた気持ちよくなっちゃうよぉ！」
「ああ！ ああぁ！ らめぇ！ でる！ でちゃう！！」

「あああああ！
きたぁ！
ザーメンまた来たぁ！」
「あっ！ あんっ！
子宮に団長の熱いザーメン
打ち付けられてる！ あっ！
あうううあ！ んっ！ んんんんっ！」
ビュルルルッ
ビュッビュッ
ビュルルルッ
ビュッビュッ
ビュルルルッ
ビュッビュッ

「さ、さる…ふぅ…
やっぱ…ボーメンいっぱいだな///」
「こ、これで、やっと一回目なのに
こんなすごい勢いで
顔付け射精されたら
あたし、おかしくなっちゃうな」
「うふ、回復魔法使えるかっだな？
こんなにカレー様に
射精されてもらえたんだから
そりゃ魔法ちょいとなるな？」

ビクッ、ビクッ
ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、